

# ネイチャー高知

No 50 2018年1月28日発行

## ツルギテンナンショウ・イシツチテンナンショウが国内希少野生生物種に

環境省では、絶滅のおそれのある野生動植物種を種の保存法に基づく「国内希少野生動植物種」として指定し、個体の採取、販売・頒布目的の陳列・広告、譲渡等を原則禁止するとともに、必要に応じ生息地等保護区の指定や保護増殖事業を実施することにより、種の保存を図っています。今回、49種の動植物が新たに国内希少野生動植物種として追加指定される方針が示されました。このうち四国に関するものは、ツルギテンナンショウ、イシツチテンナンショウ、ホシザキカンアオイ、キリシマイワヘゴ（徳島県のみ）の4種です。

ツルギテンナンショウ（サトイモ科 写真左）は高知県、徳島県、愛媛県に分布し、山地のブナ帯に生える植物です。仏炎苞に囲まれた花序付属体は有柄で棒状、黄緑色から黄褐色をおび、上部は仏炎苞筒口部から明らかに露出し、舷部に沿って前に曲がり、いちじるしいしわがあるという特徴を持っています。イシツチテンナンショウ（サトイモ科 写真右）は同じく四国山地のブナ帯に生える植物で、仏炎苞は大型で、高さ5~8cm、紫褐色で斑があり、外面はやや緑色を帯び、筒部は円筒状で上に向かって開き、口辺部はやや開出し舷部は卵形で先が鋭く尖るといった特徴があります。ホシザキカンアオイ（ウマノスズクサ科）は高知県西部に分布する植物で、高知県、愛媛県、徳島県に分布するサカワサイシンによく似ていますが、萼片中央部から上部にかけて幅が 極端に狭くなり、より尾状に伸びるという相違点があります。

今回指定されたテンナンショウ属の植物については採取圧が高いこと、シカの食害等によって生育環境が変化していることが、種の存続を脅かす理由になっています。テンナンショウ属の植物は、道の駅などの店頭でも山野草として販売されている事例を見かけます。今回の指定によって採取、販売などが規制され、種の保存が図られることが望まれます。



## 城跡・庭園の他にも松の楽しみ方 能舞台で「松を愛でる」

松本 孝（安芸市土居／自然観察指導員、吹奏楽部打楽器経験者）

日本自然保護協会「自然保護」2018年1・2月号が手元に届いて表紙を見ますと「特集 天狗の羽団扇」とありました。私はヤツデの特集かなと思い表紙をめくると「能」。私は「やった！ やっと掲載になった」と大喜びでした。日本の伝統芸能と自然とのかかわりに深みを感じます。高知県美術館能楽堂で高知県謡曲大会（主催：高知県能楽協会）が開催され、能楽堂見学会があり、普段見ることはないので鏡板の松を見てみたいと参加しました。

能舞台の鏡板の松は誰でもが描けるものではないと思いますし、岡山後楽園の能舞台の鏡板の松と切戸口の竹の絵は、郷土の池田遥邨画伯の筆によるものと資料で見ます。描かれた松のモチーフは神が降臨した春日大社の松、野外でも松の前で上演され、鏡板の松はその名残りとも聞きます。

鏡板の松は「老松（おいまつ）」（「影向松（ようごうまつ）とも言う」と知り、城跡や庭園の松を愛でる他にも松の楽しみ方が増えます。



高知県美術館能楽堂の老松をじっくり眺める貴重な機会でした

私が子どもの時、神祭の「おきゃく」で謡をするおんちゃんが3人はいました。確か「た～か～さ～ご～や～」と謡っていたと記憶しています。

「高砂」の謡い始めは誰もがご存知で話に松が出ます。相生松で原題は「相生」と聞きます。尉（じょう）と姥（うば）。兵庫県高砂市が発祥の地とのこと。

高砂人形はよく知られます。昭和50年発行「ものと人間の文化史 松 高嶋雄三郎 著」を読むと、「…お前百までわしゃ九十九まで…」は歌曲で、農民たちが豊作の祈りをこめて歌い、庶民のための松の賛歌とあり、そうだったのかと知った次第です。また、能から歌舞伎に転化して松の絵も「松羽目（松を描いたバックの羽目板のこと）」と呼び、能では松羽目とはいいないこともこの本で知りました。

私の住む地区の公民館（土居公民館）のホール舞台背景に松の絵が描かれています。「老松」をイメージしたものでしょうか。公民館の催しに敬老会があります。舞台上で謡があり、地区の方の歌や踊り、子どもたちの発表等があります。同じ絵の前で披露ですが、謡のときは「老松」に、歌や踊りのときは「松羽目」になるのかなと、ふと思いました。



私の住む地区の公民館のホール舞台（普段は左右の黒の暗幕で閉じています）

### 【松と能・狂言について知ることのできる本】

「ものと人間の文化史 松」 高嶋雄三郎 著（昭和 50 年発行 法政大学出版社）

この本の 264 頁に「5 松と芸能」があり、「松と能・狂言」に大変興味深い内容が記されていて、私がまさに知りたかったことが昭和 50 年の本にありました。

※今に受け継がれる謡曲の思想と他の和歌などとのちがひ

謡曲には、植物にも霊があるものとして霊を成仏させるという構成で、一本の草木やひとにぎりの土地にも魂があり、それを無視してはいけないと、松田修氏著「植物世相史」ではそういったところが他の和歌や物語文学に出て来るものちがうといわれ、謡曲の思想は今日まで受け継がれているとありました。

※能舞台の鏡板の松の始まり

鏡板に松が描かれるようになったのは奈良春日の神事野外能が一の鳥居わきの影向松の前でおこなわれた故事によるといわれ、豊臣秀吉が天正 9 年に桃山城の城内に能舞台をはじめて設け、影向松を舞台に描きこんだのが始まりで、枝ぶりの良さによっては舞台がぐんと引き締まってくるとありました。

※橋掛り前の松

舞台より一ノ松、二ノ松、三ノ松。これも野外にあった名残りで能舞台唯一の装飾。橋掛りでの演技はこの松を通して鑑賞となり、松が巧みに利用されている とありました。

※「高砂」は日本の慶事を代表して謡われる

松による謡曲には「高砂」、「羽衣」など（本では 25 を掲載）あり、「高砂」は長寿の夫婦ということから謡われるとありました。

「高砂」はめでたいものとして様々な祝儀にも謡われ、徳川時代は幕府の謡はじめに必ず謡われる重い位置を占めていた謡曲とありました。

---

グローバル社会とよく聞きますが、グローバルであるためにも自らが生まれ育ったローカルが基本であり大事と私は思います。

## スミレに恋して その7

### 鏡・土佐山～コスミレ街道～

細川 公子

コスミレは北海道から九州まで分布し、身近なスミレの一つ。市街地からは少し離れた低地の人里が生育場所の中心ですが、標高の高い人家の周りにも観られます。日当たりの良い乾いたコンクリの割れ目に観られるスミレに比べると、少し涼しく湿り気があって、半日陰の場所を好むようです。花は白からピンク系、濃紅紫色系まで幅広い



コスミレ



濃い色の花・距の形

す。全般的に言えることは、コスミレの特徴として花が割に大きく花付きが良く、上弁がピンと立つのでウサギの顔のように愛らしく、見栄えのするスミレです。

「コスミレ街道」私が勝手にそ



う呼んでいるのは旧鏡村、土佐山村一円の車道。3月下旬、アスファルトの裂け目や車道の法面には色々なタイプのコスミレが観察できます。コスミレは地上茎がないミヤマスミレ類で、葉は長卵形で基部は心形、くすんだ緑色、葉の裏は赤みを帯びること

高知では標準的な色

が多い。花の側弁にまばらな毛があるものが多く、ヒゲコスミレとよばれる。

また、白花はシロバナツクシコスミレといい、この地域でも見られますがほんの少し紫を帯びることが多いです。(純白の個体は須崎市で撮影したものです。)



純白(シロバナツクシコスミレ)



僅かに紫を帯びるタイプ

コスミレはごく普通種のスミレですが、私は好きなスミレの筆頭に挙げます。秋から冬の陽だまりでもポツポツ咲いていて、マラソンの練習やレース中に見つくとパッと元気になります。早春、アオイスミレに続いて花盛りとなり、本格的なスミレの季節を告げてくれます。スミレの観察会は5年ほど前まではずっと鏡ダム周辺を観察場所にしていました。かつては10種類くらい観察できた場所では、耕作放棄などフィールドが荒れてきて、山里のスミレは激減し、観察場所に苦慮しているところす。状況が変化してきている今もコスミレだけは毎年あちらこちらでまとまった花を咲かせています。“コスミレ街道”“おススメの道”です。ぜひ散策してみませんか？

.....

## 観察会のお知らせ

### スミレと早春の花観察会

筆山から皿ヶ峰にかけて、林縁や草原に咲くスミレ類、春の花を観察します

開催日時 2018年3月24日 午前9時から

場所 高知市筆山・皿ヶ峰周辺 9時筆山第2駐車場に集合

(皿ヶ峰登山口北トイレのある駐車場)

講師 細川公子さん

持ってくるもの メモ用具 あれば図鑑

雨天中止です

# わたしのフィールドノート

## 変わりゆくもの 失われゆくもの

田城光子

この地球上にはさまざまな国があり、たくさんの宗教や文化の異なる民族が暮らしており、独自の言語を有している。世界中にはいったいどれくらいの言語があるのかわたしにはわからないが、今、使われなくなって次第に無くなっていく言語が数多くあるという。ある民族では自分たちのこれまで使ってきた言葉で話せる人が10人くらいしかいなかったり、アイヌ語に至っては日常的に会話のできる人が3人しかいないそうだ。戦争などで国や民族、そして言語までが統一されてしまったり、民族間の交流がさかんになり、独特の文化が薄れていく中でそれぞれの人々の繊細な表現の仕方が失われていくことは、とてもさみしく悲しいことだ。若いころ少しの間東京に暮らしたことがある。標準語がうまくしゃべれず、幡多弁を笑われて恥ずかしい思いをした。しかし、方言でしか言い表せない気持ちがあることがわかり、今では故郷の言葉に誇りを持てるようになった。植物の方言での呼び方にも深い意味があったりして、大切にしなければならないと思う。若い人たちの会話を聞いていると、美しい日本の言葉は、はたして大丈夫だろうか、と不安になる。絶滅危惧種とは動物や植物の世界のことだと思っていたが、こんなところにも絶滅の危険があることを知った。

昨年も、変わっていく景観や失われていくものをたくさん見た。すこしずつ変化していくものもあれば、突然様相を変えてしまったものもあった。例えば、四万十川河口にほど近い水田に囲まれた大きな調整池では、毎年水面を覆いつくしてヒシが繁茂していた。冬になるとたくさんのカモの仲間など冬鳥が飛来する。ある年にはレンカクがやってきて、ヒシの上を歩き回っていた。そのヒシが、突然、まったくなくなってしまったのである。原因はわからない。また、黒尊には、高知県での生育地が非常に少ないキオンが知られている。稜線付近に生えるミヤコザサが二ホンジカの食害にあう前までは、個体数は少なかった。ササが食われ裸地が広がるにしたがって、キオンは生育の範囲を広げ、スーパー林道に沿って大群落をつくり、高知、愛媛県境の峠付近では一面キオンが咲き乱れていた。ところが、昨年開花時期にあわせて行ってみると、そのキオンがまったくといっていいほど見られなくなり、みごとにシソ科のシモバシラに置き変わっていたのである。林道脇に生えているシナダレスズメガヤや、サンショウ、イヌザンショウなどの柔らかい先端部分はことごとくシカに食われたあとがあるのにたいし、わずかに残っているキオンには

食害は認められない。シカはキオンを食さないと思っている。急激なキオンの減少には、キオンの生態に原因があるのだろうか。個体数が大幅に増加したとあって安心してはいけないと思った。

水田雑草や里山に生育する植物は悲惨である。予想通り、耕作放棄地が拡大し荒れ地が増える一方である。このようなところには外来種の侵入も多く、競合によって絶えていくものが多い。稲作の時期や方法も変わっていくので、これまで稲作によって守られてきた環境が変化し、水田雑草や周辺に生える植物の生活史のサイクルにあわなくなったものもあるのだろう。雑草が生えても開花結実をまたずに、すぐに何度も耕起されたり、草刈がされたり、あるいは除草剤がまかれる。水田の中はどんどん植生が単調になっていく。そのように感じるようになった。

たまにホシクサの仲間や、ミズキカシグサ、ミズマツバ、スズメハコベなどが群生する田んぼを見つけると、「この田んぼでとれたお米は美味しいだろうなあ」と独り言をいいながら、その場にしゃがみこんで、あきず眺めてしまう。多様性が高いということは、本当に素晴らしいことなのだ。形のあるものもないものも、目に見えるものも見えないものも、地球上のすべてのものは、その中でうまくバランスを保って平和で豊かに生きることができる。わたしには、現実を観て記録する、ただそれだけのことしかできないけれど、今年も自分にできることをやっていこうと思っている。そのむこうには、植物の変化だけにとどまらない、さまざまな世の中のこと、きっと見えてくるはずだ。



多様性を示す水田の植物 左：ホシクサ 右：ミズマツバ

## 成年の初めに イヌカタヒバとニッポンイヌノヒゲ

坂本 彰

今年の干支は「戌」。それにちなんで何か書こうとして真っ先に思い付いたのが「イヌノフグリ」。書き始めて、「何となく以前にも書いたなあ・・・」と思い、調べてみると2015年に書いていた。そこで別のネタ探しになったのであるが、何らかの形で「イヌ」が付いた植物は結構多く、どれを選ぶが迷ってしまった。

イヌを冠した植物が多いといっても、それは「イヌ」が似て非なるもの、劣るものやくだらぬもの無駄なものを表す言葉として用いられる場合が圧倒的に多く、つけられた植物の側からすれば、なんとも不名誉なというか、ありがたくないと思っているに違いない。また、犬の体の一部に似ていることからつけられた名前もあるが、イヌノハナヒゲ（犬の鼻髭）はともかく、イヌノフグリ（犬の陰囊）はよく形を表しているとはいえ、何となくたとえが悪いと感じてしまう。植物の世界になると「イヌ」の扱いは何とも粗末である。いつものことながら前置きが長くなったが、成年にちなんで犬の名前が付く植物のうちから、最近多く見かかるようになったイヌカタヒバとやや稀なニッポンイヌノヒゲを紹介する。

イヌカタヒバはイワヒバ科、イワヒバ属のシダ植物である。環境省編のレッドデータブック2014では、産地が局限されることから絶滅危惧Ⅱ類に位置付けられているが、それは自生地でのことであろう。本来の分布域は西南諸島南部からベトナム、フィリピンにかけてであるが、最近高知市内でも見られるようになった。私の散歩コースはおおよそ片道30分の範囲であるが、その中で野生化しているのが3か所、野生化しそうなものが2か所もある。野生化しているのは道路の側溝と水路の壁で、野生化しそうなものは栽培植物の鉢やプランターの傍である。栽培植物の鉢やプランターもイヌカタヒバを栽培しているものとは思われないことから、苗あるいは栽培用の土に紛れ込んで非意図的に持ち込まれたものと推測される。環境省のレッドデータブックでは温室からの逸出が指摘されているが、私が見たのはいずれも温室とは関係ないところである。温室のような施設からではない逸出ルートがあるのだろう。

この植物は常緑性とされるが、冬になると赤みを帯びてくる（図1）。特にやや乾燥した場所ではその傾向が強く、湿った側溝に生えるものは緑とはいいがたいものの赤くは



図1



図2

ならない。イヌカタヒバの名は、カタヒバに似て非なるものとの意味であろう。その名のとおりにカタヒバに似ているが、いくつか区別できる点があり、背葉の先端が芒状になる点は四季を通じてよくわかる（図2）。

ある地域で絶滅にひんしている植物が、別の地域へ持ち込まれそこで広く繁茂する事例は多くを知らないが、本来の生育地からはるか北に生育することとなったイヌカタヒバが今後どのような推移をたどるのか注目していく必要があると考える。

ニッポンイヌノヒゲ（図3）はホシクサ科ホシクサ属の植物である。同じ属でイヌに関連する名を持ち、高知県に分布する植物として、ニッポンイヌノヒゲ以外にイヌノヒゲ、ヒロハイヌノヒゲ、イトイヌノヒゲがある。イヌノヒゲがベースになって、ヒロハ（広葉）、イト（糸）、が付けられたことは容易に想像できるが、ニッポン（日本）については、何に由来するのかよくわ



図3

からない。いくつかの図鑑を見てみたが、名の由来に関する記述は見つからなかった。

よく似た名前前の植物にイヌノハナヒゲのグループがある。こちらの方はカヤツリグサ科のミカツキグサ属の植物で、イヌノハナヒゲをベースにコイヌノハナヒゲ、イトイヌノハナヒゲがあり、大きい方はオオイヌノハナヒゲでなくてトラノハナヒゲになってしまう。トラノハナヒゲは牧野富太郎が付けた和名で、「イヌノハナヒゲのイヌに対比して虎を用いた」と牧野植物図鑑に書かれている。トラノハナヒゲについては書きたいことがたくさんあるが、それは寅年のために取っておくこととしたい。



図4

話をもとのニッポンイヌノヒゲに戻すと、この種を含むホシクサ属の植物はごく小さい花がたくさん集まって球形あるいは半球形の頭状花序になっている。イヌノヒゲの名前は頭状花序を包む総苞葉が長く突出している様子を犬の鬚に見立てたものである（図4）。似ていないとは思わないが、命名された方の発想力に感心させられる。

ホシクサ属の植物の生育地は水田や湿地であるが、除草剤の使用や耕作放棄地の増加など生育環境は年々悪化している。残念なことに環境の悪化を止める方策はなかなか見つからないが、今後とも注意して観察を続けていきたい。

#### 【参考図書】

高知県植物誌（牧野記念財団） 牧野新日本植物図鑑（北隆館） レッドデータブック 2014（ぎょうせい） レッドデータプランツ（山と溪谷社）

